季刊地理学 Vol. 52 (2000) pp. 48-52
Quarterly Journal of Geography

山形県の明治前期の商品流通に関する新資料

葛　西　大　和*

キーワード　山形県，商品流通，日本鉄道会社，秋田県公文書館，山崎文庫

I. 本報告の目的

筆者は，先に山形県の近代における移出入貨物の構成変化と，1899（明治32）年に始まる鉄道の開通による移出入貨物の地域的流動関係の変化を明らかにした（葛西，1997）。さらに，これに関連して，近代に至るまで山形県下の商品流通において重要な役割を演じてきた最上川の舟運が，改修整備された道路輸送と新たに開通した鉄道輸送の影響を蒙って段階的に縮小し衰微していった過程を明らかにした（葛西，1998）。

ところで，このほど秋田県公文書館に収蔵されている1簿冊中に，明治前期（明治17年）の山形県の移出入貨物に関する統計資料が収録されていることを確認した。本報告は，山形県の近代の商品流通史研究において空白となっていた明治前期の物産移出入に関する新資料を紹介するとともに，後年の移出入パターンとの比較からこの時期の移出入パターンの特徴を明確にすることを目的としている。

II. 山形県における明治前期の物産移出入パターン

1. 明治前期の商品流通に関する新資料

山形県の編集になる1884（明治17）年の移出入貨物統計は，『明治二十年代鉄道関係書類綴』に綴じられている[1]。本簿冊は，上野と青森間を結ぶ日本鉄道会社の鉄道敷設計画[2]により俄に昂揚した明治10年代後半から20年代前半の奥羽地方における鉄道熱の時代にあって，秋田県での動向を窺い知ることのできる唯一の県庁文書[3]であるが，山形県の物産移出入表は第4文書[4]（「鉄道営業費ニ付山形県トノ往復」）の付属資料に含まれている。

「山形県輸出表」は49の移出品目，そして「山形県輸入表」は47の移入品目についての数量と価額を記録している。調査対象品目数は，移出入品とも48品目に拡大された1899（明治32）年時の改正品目数とほぼ同数である（葛西，1997, p. 6）。当時，商品の移出入調査といえば，山形県では酒田と加茂両港の輸出入調査と同義であったが，1884（明治17）年の「山形県輸出表」と「山形県輸入表」に記録されている統計の拠り所は何であろうか。

結論的に言えば，明治前期（明治17年）の移出入に関する統計材料の源泉は，1885（明治18）年3月21日の「山形県達丁第12号」による調査であったと考えることができる。その理由は，それまで酒田と加茂の商港に限定していた移出入貨物調査を初めて山形県下全域に拡大し，その結果を「戸長役場毎ニ取纒メ五月十五日限」で提出することをこの県達が指示しているからである（葛西，1997, p. 5, 21）。初めての調査にともなう問題があったにせよ，首尾よく事が運んだとすれば，明治17年分の移出入に関して信頼に足る統計材料を収集できたことになる。

* 山形大学農学部　〒990-8560　山形市小白川町1-4-12

それでは，山形県はなぜ移出入表のような手数のかかる統計を編集しただけでなく，それを印刷物にする必要があったのだろうか。その訳は，おそらく奥羽地方の鉄道熱に火をつけた日本鉄道会社の鉄道敷設計画と関連している。岩手県庁所蔵文書に興味深い記録が残されている。それは，日本鉄道会社の路線が盛岡経由になるかどうかに関してなお未確定要素があった1885（明治18）年10月下旬に奥羽近県の鉄道敷設実況調査という特命を帯びた岩手県官吏斉藤庄一が提出した「鉄道敷設実況視察復命書」[5]である。そこには，山形県の記事として「鉄道敷設請願ノ計画能ク整ヒ居候且其計画ノ端ヲ開キタルハ数月以前ニアル亅ナレハ株金募集ノ事ヨリ請願書ニ添付差出スヘキ人口物産ノ高及輸出入ノ斤量等渾テ完備斉(ママ)頓本年十月八日ヲ以テ其筋ニ請願書ヲ進達スルニ至リタル由」という記述がある。復命書のこの記事は，明治18年10月8日に，山形県令折田平内が調書を添付して工部卿に日本鉄道会社の路線変更を請願したことを今日に伝えている。これらの調書の内容を確定していないが，「山形県輸出表」を始めとする調書（秋田県公文書館所蔵の『明治二十年代鉄道関係書類綴』中に収録されている13の付属資料と同じ印刷物）であった可能性が高い。そうであるとすれば，これらの調書，すなわち付属資料は山形県令が工部卿に路線変更を請願するための必要資料として編集印刷されたということになる。

2. 移出入貨物の構成と明治前期における物産移出入の特徴

1) 移出貨物

第1表は，以上の経緯をもって作成されたと考えられる「山形県輸出表」と「山形県輸入表」を資料として，1884（明治17）年における山形県の移出品と移入品の構成を整理したものである。比較のために，1899（明治32）年の移出入構成を『山形県勧業年報』から作成して第2表に示した。

明治17年の移出品の総額は328万円，明治32年のおよそ半分の金額である。米麦雑穀類が大きな比重を占めるが，生糸・糸織（絹織物）・清酒といった農産物の加工品が，米麦雑穀類と並ぶ移出品になっている点が注目される。この他，薄荷・菜種・青苧などの加工用原料品が移出品[6]を構成している。

第1表　明治17年の移出入貨物の構成

順位	移出				移入			
	品目	数量	価額（円）	％	品目	数量	価額（円）	％
1	米	260,633石	1,248,435	38.0	木綿	1,138,900斤	583,116	22.1
2	生糸	179,751斤	719,004	21.9	干魚	6,284,120斤	226,228	8.6
3	清酒	7,539,371斤	324,192	9.9	生糸	49,072斤	196,288	7.4
4	糸織	62,703斤	300,974	9.2	呉服	107,361斤	180,366	6.8
5	薄荷	48,251斤	193,004	5.9	銅鉄器	120,833斤	144,999	5.5
6	糯	14,215石	75,344	2.3	石油	8,580石	102,962	3.9
7	大豆	15,059石	62,495	1.9	繰綿	419,140斤	100,593	3.8
8	小麦	12,793石	39,018	1.2	茶	237,988斤	95,195	3.6
9	油粕	7,539,371斤	37,721	1.1	塩	85,786石	85,786	3.3
10	菜種	294,700斤	27,742	0.8	生魚	4,386,297斤	82,171	3.1
その他			254,379	7.8	その他		843,479	31.9
計			3,282,308	100.0	計		2,641,183	100.0

1)「山形県輸出表」及び「山形県輸入表」（明治17年）より作成。

第2表　明治32年の移出入貨物の構成

順位	移出				移入			
	品目	数量	価額（円）	％	品目	数量	価額（円）	％
1	生糸	58,210貫	3,485,440	50.8	砂糖	1,445,432貫	734,416	10.5
2	絹織物	234,227反	1,483,400	21.6	和紙	192,963貫	514,283	7.4
3	米	105,630石	944,091	13.7	綿糸	245,576貫	501,819	7.2
4	清酒	21,600石	547,707	8.0	綿織物	583,792反	495,248	7.1
5	繭	48,251斤	58,230	0.8	石油	30,152貫	454,572	6.5
6	玉糸	12,481斤	69,875	0.7	絹織物	81,857反	395,364	5.7
7	薄荷	22,050斤	45,584	0.5	食塩	150,530石	379,524	5.5
8	薄荷脳	8,969斤	33,940	0.5	生魚	705,886貫	364,658	5.2
9	蚕種	19,450枚	25,780	0.4	生糸	5,161石	327,295	4.7
10	刻煙草	10,548貫	24,934	0.4	鉄材	672,012貫	301,786	4.3
その他			178,109	2.6	その他		2,504,613	35.9
計			6,867,090	100.0	計		6,973,578	100.0

1）『山形県勧業年報』（明治32年）より作成。
2）「絹織物」の移出数量は，表現の都合上，反表示のみの数量を表示してあるが，その他に，本表示の数量が13,048本ある。移入の「綿糸」欄は，綿糸（144,050貫）と紡績綿糸（101,526貫）を合計した数字である。本表においては綿糸を合計して示してあるため，明治32年の数字は，葛西（1997）の表2（p.7）と対応しない。なお，度量衡の換算は，1貫＝3.75 kg，1斤＝0.6 kg，1石は約150 kgである。

2）　移入貨物

明治17年の移入品の総額は264万円，明治32年のおよそ4割にあたる金額である。塩乾鮮魚類[7]を始めとする食品類から銅鉄器・石油・呉服・小間物類に至るまでの各種生活物資が大きな比重を占める。他方で，木綿・繰綿・生糸・生蠟などの加工用原料品の移入が注目される。この段階では，木綿と繰綿の移入は，製品としての綿織物の移出を前提としたものではなく，移出用絹織物の原材料になったと考えられる生糸以外は，山形県の移入品[8]は専ら県内で消費される商品から構成されていたといえる。

3）　明治前期における物産移出入の特徴

米麦雑穀類と酒を主に，生糸と絹織物を従に販売しては，食品類から加工用原材料までの各種の生活必需品を専ら購入するという明治17年の物産移出入に見られた特徴をさらに浮き彫りにするためには，明治32年との比較が有効な方法である。

明治32年の移出額は明治17年の2.1倍であるが，米と清酒は，それぞれ0.8倍と1.7倍にすぎない。対照的に，生糸[9]と絹織物は，ともに4.9倍の移出額を記録している。不作の影響で移出石数が明治17年実績の40.5％まで落ち込んだ米の移出品としての地位低下にともない，米と清酒の比重（21.7％）は，生糸類と絹織物の比重（73.1％）を大きく下回っている。移出額の半ばに達する移出品としての生糸の大躍進によって，上位3品目への集中度は86.1％（明治17年は69.8％）となり，移出品は特定少数の商品への傾斜を強めている。

明治32年の移入額は明治17年の2.6倍であるが，砂糖が9.2倍，和紙が8.1倍，石油・食塩・生魚がともに4.4倍の移入額を記録しているのとは対照的に，綿糸は0.9倍にすぎず，生糸も1.7倍にとどまる。和糸と考えられる綿糸に，輸入糸か国産糸かは判然としない洋式の紡績綿糸と，綿と表記されている繰綿を合計した綿糸類の割合はそれでも11.4％

であるが，明治17年と比較すると，大幅な減少である。ここには，綿織物の移入によって影響を受けている県内の家内工業の姿を見ることができる。生糸の地位の低下は，県内における製糸業の発展によって生糸の自給基盤が強化されたためと読むことができよう。

他方で，移入品の最上位にある砂糖の1人あたりの消費量（17年の0.3貫から32年の1.7貫へ）の変化[10]に表現されているように，この間に，各種消費物資に対する需要の著しい増加が認められる。移入数量において，それぞれ6.9倍と6.1倍を記録している砂糖と和紙の移入量の増加はそれに対応している。

III. 要　　約

以上の分析結果を要約すると以下のようになる。

(1)　1884（明治17）年の「山形県輸出表」と「山形県輸入表」の統計は，1885（明治18）年3月21日の「山形県達丁第12号」に基づいて編集されたと考えられる。これらの統計が作成された理由は，上野と青森間を結ぶ日本鉄道会社の路線がなお盛岡経由になるかどうか未確定であった1885（明治18）年10月8日に，山形県令が 工部卿に日本鉄道会社の路線変更を請願する際の調書として必要であったからであると考えて間違いがないだろう。なお，明治17年の統計は，移出入品とも明治32年の調査対象品目数に並び，統計資料としての信頼性は高い。

(2)　明治17年の移出入収支は出超状態にあり，米麦雑穀類と酒を主に，生糸と絹織物を従に販売しては，食品類から加工用原材料まで各種の生活必需品を購入する移出入パターンを特徴とする。明治17年の移出入表には，デフレ下の消費の低調さと同時に農業を基盤とする「在来産業」の一定の発展を窺うことができる。

(3)　明治32年の移出入収支は入超状態にあり，生糸と絹織物が移出品の柱として急成長を遂げる一方で，砂糖に代表される日常生活物資の消費が増大する移出入パターンに変化している。明治32年の移出入表には，消費の浸透と「在来産業」における工場制生産の進展を窺うことができる。

（1999年12月2日　受理）

注

1)　「山崎文庫1215」として登録されている簿冊の表書きは，「明治廿年代奥羽鉄道関係記録集（牛角文庫蔵本）」である。本簿冊に「鉄道関係書類」として22の文書が収録されている。

2)　奥羽または陸羽地方の鉄道熱が盛り上がった背景には宇都宮以北の日本鉄道会社の路線が最終的に確定していなかったという事情がある。明治18年10月8日，山形県令折田平内は，「陸羽地方ノ全体ヲ観察スルニ 宮城ヨリ盛岡ヲ経テ青森ニ達スルハ路線ヲ易ヘ之ヲ山形，秋田ヲ経テ青森ニ達スルモノトセハ路線ノ険夷，戸口ノ疎（ママ）密物産ノ多寡固ヨリ同日ノ比ニアラズ，是ヲ以テ路線ノ変更ハ最モ国家ノ鴻益ナリト信ス」（『日本鉄道史』中篇，pp. 113-114）と，工部卿に対して路線変更を具申している。

3)　平成9年度の公文書館企画展（「県庁文書で見る秋田の鉄道史」）用に作成された小冊子では山形県の鉄道関連事項に関する調書への言及はない。

4)　明治20年6月8日付で，秋田県が「鉄道役員給料及営業ニ関スル一切之費用予算明細調書」の回送を依頼したのに応えて，明治20年6月14日付で，山形県が回答した文書中には，山形県の鉄道関連事項に関する調書である13葉の付属資料（「山形県面積周囲広袤調」，「山形県戸数人口民有地并地価調」，「山形県管下官有山林原野調」，「山形県管内職業調」（同士族戸数調），「鉄道布設見込地各地目地価調」，「鉄道布設見込地人夫賃調」，「栗材価格調」，「陸送賃金調」，「最上川筋貨物運漕賃調」，「山形県輸出表」，「山形県輸入表」，「馬車人力車乗客人員及賃金表」，「輸出物品運賃表」）についての記述はなく，資料の送付日を特定できない。幻に終わった「秋田鉄道会社」の創立が明治20年4月に起案（『明治二十年代鉄道関係書類綴』所収，第6文書「秋田鉄道会社創立ニ付私案」）されているので，資料の送付はその時期まで遡る可能性もある。

5)　明治18年11月17日復命，明治19年『鉄道回議綴』（文書番号192）所収，岩手県庁所蔵。

6)　11位以下の20位までの移出品目は，小豆・真綿・

筆・荒物・青苧・熨斗糸・屑糸・酒粕・烟草・荒銅からなり，移出品の 5.8% を占める。

7) 「山形県輸入表」には，移入品目に塩魚の記載がないので，干魚（乾魚）に含まれている可能性を否定しえない。

8) 11 位以下の 20 位までの移入品目は，生蠟・砂糖・小間物・薬・紙類・古着・畳表・漆器・煙草・荒物からなり，移入品の 22.8% を占める。砂糖は 3.0%，紙類は洋紙を加えると 2.8% である。

9) 明治 17 年の生糸の移出数量は 28,760 貫と換算できるので，明治 32 年の移出数量は 17 年の 2.0 倍となる。

10) 明治 17 年の人口は，内務省地理局編集『地方行政区画便覧』，明治 32 年の人口は，内閣統計局編纂『明治三十一年日本帝国人口統計』の現住人口を計算の基礎とした。

文　献

葛西大和 (1997)：明治・大正期の山形県における商品流通の変化．歴史地理学，**39**-4, 1-24.

葛西大和 (1998)：1870 年代から 1910 年代に至る最上川舟運の変化，地理学評論，**71A**, 824-844.

鉄道省編 (1921)：日本鉄道史(中篇)，鉄道省，113-114.

New Materials on Trade Pattern of Yamagata Prefecture in 1884

Yamato KASAI*

Key words: Yamagata Prefecture, trade pattern, Nippon Railway, Akita Archives, Yamazaki Library

* Section of Regional Environment Science, Faculty of Agriculture, Yamagata University, 1-4-12 Kojirakawa-machi, Yamagata 990-8560, Japan